

一般社団法人 日本・ドミニカ共和国友好親善協会  
第4回 World Baseball Classic 開催記念コラム  
第二回：“Roots of Dominican Dream”

文：八谷智隆

(ドミニカ共和国・広島東洋カープアカデミーオブベースボール駐在員)

2013年の第三回ワールド・ベースボール・クラシック(WBC)で史上初の全勝優勝を果たし、一躍注目を浴びたドミニカ共和国。バレーボールファンの方にはよく聞いた国名かもしれないが、野球界においても、サミー・ソーサやペドロ・マルティネス、ディビット・オルティス、アルバート・プホルス、ロビンソン・カノなど数多くの有名メジャーリーガーを輩出している世界屈指の野球強豪国だ。

ドミニカ共和国の野球の歴史は古く、1886年にキューバからやってきた船員たちがドミニカ共和国で野球をやっていた、1891年にキューバ人政治家の兄弟がドミニカに野球を持ち込んだとも言われている。プロリーグが設立されたのは、意外と遅く1951年だ。

現在では、選手の発掘・育成を目的として、メジャーリーグ30球団が拠点やアカデミーを置いており、日本球団としては広島東洋カープがアカデミーを開設、これまで数多くのドミニカ人選手がメジャーやNPBで活躍している。2016年のメジャーリーグ開幕時に登録されたドミニカ人選手数82名は<sup>1</sup>、アメリカ国外出身選手では最も多く、中南米カリブ諸国において、ドミニカ共和国の影響力が随一であることを示している。

ドミニカ共和国では、野球は貧困から抜け出す手段にもなっており、ドミニカの一般的な家庭では男子が生まれるとまず野球をさせる、と言われている。事実、「プログラム」と呼ばれる子どもたちに野球を教えるクラブは町の至る所に数多く存在し、その中からメジャーリーグアカデミーなどにスカウトされる。スカウトされた際の契約金は、選手によっては何億円相当にもなり、まさに「ドミニカンドリーム」だ。

しかし、少年たちは、実にのびのびと楽しそうにプレーをする。「何とか契約しなければ」、「お金を稼ぎたい」という悲壮感など微塵もなく、失敗を恐れず、思い切りボールを投げ、楽しそうにバットを振る。コーチも少年たちには、決して「エラーするな」「三振するな」などとは言わず、「ホームランを打て」「思い切り投げろ」などとアドバイスをする。そこには投げる、打つ、走るといった純粋に楽しむ野球がある。日本でプレーした経験のある成人選手は「なぜ日本人は試合の時に緊張するんだい？試合は楽しいから緊張しないでしょう」と言っていた。ドミニカでは試合のことを「Juego(フエゴ:スペイン語で遊びの意)」と言う。どちらかと言えば、日本語の試合という単語ではなく、英語のゲームが意味としてピッタリだと感じる。野球を楽しくプレーし、伸び伸びと自分のパフォーマンスを発揮

<sup>1</sup> <http://m.mlb.com/news/article/170477992/mlb-rosters-feature-238-international-players/>

する。こうした指導方法が、数多くのメジャーリーガーを生み出し **WBC** 第三回大会で全勝優勝を果たし、今年行われる第四回大会でも優勝候補に挙げられるタレント集団を作り上げているのかもしれない。



外野ノックを受ける子ども達（サンペドロ市内の野球広場、八谷智隆氏提供）



野球広場全景。広場外には馬が放牧されている（同上）

**WBC** 第一回、二回大会を連覇した日本代表と第三回大会で圧勝したドミニカ共和国代表は、実はこれまで **WBC** の舞台で直接戦ったことがない。個人的には、今大会、優勝の決まる決勝戦の舞台で、王者返り咲きを狙う日本と連覇を狙うドミニカ共和国が対戦してくれないか、と密かに願っている。いざ日本とドミニカが対戦となれば、当然日本を応援することになると思うが、ドミニカ共和国にも負けてほしくないという複雑な心境である。いずれにせよ、今大会もドミニカ共和国の動きから目が離せない。

### 筆者紹介

八谷智隆（やたがいともたか）

1986 年生まれ。広島大では硬式野球部の投手として活躍、その後 MSH 医療専門学校硬式野球部で投手兼任コーチとして社会人野球で 2 年プレー。2012 年に広島東洋カープに球団職員として入社、同年 12 月よりドミニカ共和国のカープアカデミー駐在員として勤務中。